週刊読書人 2011年10月14日号

西田　勝編

田岡嶺雲全集　第三巻

評論及び感想三

『壺中観』とエッセー百数十篇を収める

充実した解題と編注を含む大冊

鈴木　正

待望の第三巻が出た。一九六九年に刊行がはじまり、前回の配本から24年ぶりだ。それは西田勝氏の嶺雲に対する熱い思い入れと緻密な考証的書誌的なこだわりからきている。

本巻は明治37年に発禁となった『壺中観』の完全版をはじめ、政治の改革者、文明批評家として自利きの高い鋭いエッセー百数十篇を収め、充実した解題と編注を含む八五三頁の大冊である。

巻頭の「悪魔的文明」は、嶺雲の思想の多面性をほぼ網羅している。彼は「現代の所謂文明」を咀い、それがあまりにも「唯物的」だから実用と功利に走り、教育も物を識ることに偏して心を養うことを忘れ、義よりも利を重視する。その結果、貧富の大きなへだたりが怒りをむさぼり、地上は修羅場と化したという。さらに彼は器械の悪魔から分業・印刷・慈善の悪魔「浮佻な女人を煽動する」世間の悪魔や「階級の争を激成する」社会主義の悪魔まで文明の諸相を並べて糾弾している。それは本来めざした自由と正義から逸脱した報いだ。今なおのりこえられていない社会現象に対する鋭利な短詩型の文体は歯切れがいい。

この根源的な文明批判をさまざまなエッセーの論点とつなげて開示してみよう。まず「哲学」についていえば、「哲人は回顧す」では、老子、孔子からルソーまで引いて人間の歴史の黄金時代を「太古元始」の素朴に求め、進歩も開化も物資上功利上のことで、精神上道義上では堕落したとみる。彼の哲学観には、宇宙の大原理の研究といえども、それは宇宙の宇宙でなく人間の宇宙、つまり「人間の感能、人間の知識に識得せられたる宇宙だ」という俗流実在論を超えた卓見がみられる。

つぎは社会主義と帝国主義について――幸徳秋水の『社会主義神髄』をとりあげ「自由平等博愛の大義に拠って」社会主義を唱える秋水を中江兆民門下で「先師の衣鉢」を継ぐ者と評している点に注目したい。この大義にもとづいていれば20世紀の革命と独裁の苦難はなかっただろうと思う。秋水の文章を「繁簡」の要を得て、条理は整然としているとほめる反面「独創奇警の見地」に欠けると指摘している。のちに大逆事件で、いっしょに捕らえられる深い仲（嶺雲は釈放）だが、提灯持ちの記事にしていない。もう一つ秋水の『帝国主義論』に対しても「雄健熱烈」な文の妙を讃えながら、帝国主義の見方が秋水と異なる点にふれている。嶺雲は世界が必ず統一されるという信念の持主である。帝国主義は世界統一共同体に達する一階段だとみている。愛国・軍国・帝国主義を憎む点では共通だが、秋水は現前の見地に立って批判し、自分は終局の見地から楽観しているとのべている。

日露戦争に秋水は堺利彦、内村鑑三らと非戦論を唱えたが、嶺雲はちがっていた。「韓半島」に国力を発展させることは、神功皇后から豊臣秀吉、さらに征韓論者の名まであげて「歴史的大国是」だと把え、その延長でロシアの東方経営の準備がととのわない「今日に於いて乾坤一擲」立てと主戦論を主張する。だが反面の論理が重要である。

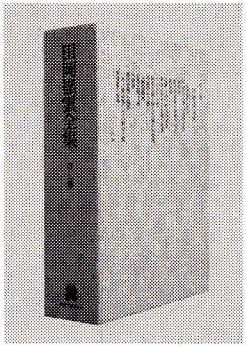
「若し訂約［平和的解決］果して成らば、吾人は此以後軍備の競争に国民を煩らしめんよりは、寧ろ凡ての我軍備を挙げて之を撤し、一切の砲煩、一切の剣戈を巨爐中に投じて之を鎔かし、これを以て一大的號鐘を鑄造し、銘して平和の巨鐘と名づけ、時々刻々殷々たる鯨吼に、自由、平等、正義、人道の先聲を搗き出して世界万邦のあらゆる帝王、主権者、延臣、閣臣と、あらゆる民衆の上に平和の警醒を布かん。」（「寧ろ平和の一大號鐘を鑄よ」）

難解かもしれぬが、嶺雲の逆説の利いた雄渾な文章を味読してほしいと思って引用した。

現代文明を唯物的という嶺雲の立場は唯心的主観主義だ。その先に興味ある新見解が顔を出している。「現代思想革命の兆」のなかで、その哲学的見地から催眠術をとりあげ、「形而上の霊気における神秘を啓く」鍵だとみて、科学者が「物資以上の心霊の作用とその合理を認めた」のは思想の一大革命だという。彼は催眠状態を「無我」とみて「無何有」（荘子のいう自然のままの人為のない楽天地）に遊ぶ境地だと評価している。この点に限っては私はコメントしないで紹介するにとどめる。

読み終って編者の長年の労苦に感謝し、今後の続刊に声援を送りたい。（すずき・ただし氏＝名古屋経済大学名誉教授・日本思想史専攻）

★にしだ・まさる氏は西田勝・平和研究室主宰・植民地文化学会代表。東京大学卒。著書に「グローカル的思考」「近代日本の戦争と文学」「文学・社会へ地球へ」など。一九二八（昭和3）年生。



四六判・876頁・15750円
法政大学出版局
978-4-588-11028-3